

Title	山本純也先生を悼む
Author(s)	岡田, 東一
Citation	大阪大学低温センターだより. 97 P.23-P.24
Issue Date	1997-01
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/5680
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University



山本純也先生を悼む

産業科学研究所 所長 岡田 東一 (8380)

山本純也先生とお近付きになったのはたしか30年も前の1968年(昭和43)の頃と思います。当時は工学部が東野田から吹田へ移転し、新しい建屋で研究室の整備が始まっていました。低温の実験については液体チッ素の供給もままならぬといった厳しい状況でした。理学部の極低温実験室(中之島)はそれより10年も前の1958年(昭和33年)に設置され、1964年(昭和39年)に豊中地区の新しい建物に移りました。

私達が渴望していた低温センターの概算要求は当時の理学部と工学部の協力によって陽の目を見ることになり豊中・吹田両キャンパスに設置されることになりました。吹田地区には液化ヘリウム液化機(三菱UL-80H)と、大型ヘリウム液化機(三菱UL-150E)が設置されました。折しも山本純也助手が吹田地区の液化室長として着任されたのでした。

山本純也氏と私は共に阪大工学部では最も早く液体ヘリウムを使用し始めた研究者の一人であるという意味の同類意識をもっていました。彼は生真面目で、酒・煙草を全くたしなまず、仕事一途の人物でした。自分の研究を大切に発展させる一方で常に多くの人々に液体ヘリウム、液体水素などの極低温寒材とそれを活用する技術を提供し、低温工学を広めるべく努力されました。低温工学協会関西支部の設立(1974年)と同時に庶務幹事と会計幹事の激務をこなし、学外の低温工学界の発展にも大きく貢献されました。

彼の大きな目標は低温工学の他に低温工学を体系化することにあったようです。一つの具体的な行動として低温工学研究連絡会なるものを吉永先生の了解を得て作りました。この機関紙として彼は1973年10月にクライオメモ(B5版で6ページくらいの長さ)を出版することとしました。この内容は低温のトピックス、低温工学の最近号の目次/内容紹介、講演会や研究会案内、図書案内、Date sheets案内、などで、毎月1回の発行を目指しました。これは1979年3月の54号まで6年以上も続きました。毎月手書きで6ページの情報を継続して自費出版することは並大抵の努力では続きません。私は柔らかな風貌の彼の中の辛抱強さに舌を巻きました。

彼はまた組織のマネージメントにも優れた感覚を持ち、ある時は厳しくある時は説得力をもって事を進めました。全てのことに前向きで、研究会、国際シンポジウムへの積極的な参加、それらのオーガナイゼーションに非凡な能力をもっていました。

彼はまた建物のデザインなどハードにも強く、その後、工学部附属として認められた超伝導実験センター、極低温材料試験室、超伝導エレクトロニクス研究センターなど低温工学関係の概算要求や建物/設備の建設にも工学部で随一の実力をもっていました。

彼はまた新しいプロジェクトへむけて人を動かす術にたけていて、独特な物腰で説得するのがうまく、

私も断り切れずに引き受けてしまった役柄が何件かあります。阪大オリジナルをモットーとする「低温センターだより」の編集委員や我が国はじめての超伝導エネルギー貯蔵シンポジウムも山本純也氏が引き受けた以上は極めて緻密な計画のもとに成功を取めることができました。

最近核融合科学研究所において低温・超伝導部門の責任者として大型ヘリカル装置の製作に8年がかりで傾注されほぼ90%まで完成、来年(1998年)の運転を楽しみに頑張っておられました。1996年10月9日にはほぼ完成した土岐市の新サイトで行われた超伝導シンポジウムでは体の不調をおして講演され、2日後の10月11日に再入院、その3カ月後には悲しい事態となりました。享年56才、真面目一筋の研究者、山本純也先生の命を縮めたものは人類の悲願である究極のエネルギー源である“核融合装置の実現”へ向けての巨大科学の責任者としての精神的ストレス(もその一因)であったように思います。

この重要な仕事が来年正に成果を問われようとする時期にこの世を去られたことは人類にとっての大きな損失といわねばなりません。今後のLHDの発展をあとに続く若手の研究者にゆだねて山本先生は天国から私達を見守ってください。

心からご冥福をお祈りします。